

バ ン グ ラ フ ス ジ ュ 紀 行

バングラデシュ紀行

貧しさと未来の胎動

バングラデシュは貧しい国だ。バングラデシュ政府による調査(2016)によると、総人口の24パーセントが慢性的な貧困層、12パーセントが極貧困層に位置づけられている。

また個人の生活の豊かさを示す指標の一つに、一人当たり購買力平価換算GDPという指標があるが、バングラデシュは四一ニ〇ドルで、世界192か国中146位である。(2016 IMF- World Economic Outlook Databases)。このGDPは日本の十分の一だ。分かりやすくいえば、バングラデシュの平均的な生活水準は、日本の大正の頃と同じなのである(Angus Maddison HP)。

もちろんバングラデシュにも二十一世紀の科学技術文明のひかりは届いており、ジェット機も飛んでいるし、自動車もたくさん走っている。携帯電話の普及率は80パーセントだという。それにもかかわ

らず、農村部の多くの人は、泥壁に屋根はニッパヤシの葉で葺いた掘立小屋のよ
うな家に住み、電力網の普及率は40パー
セント程度にとどまっている。
ダッカなどの都市部に住む一部の富裕
層は、二十一世紀の科学文明の恩恵に浴
しているが、国民の多くは十九世紀的な
生活を送っているのである。つまり、バ



ングラデシュはどこからみても、国民の
約四割近くが正真正銘のビンボーな国な
のだ。

東アジアの国々は二十一世紀に入って
目覚ましい経済成長を遂げた。お隣のイ
ンドもリーマンショックで多くの新興国
がつかまずく中で、中国とともに順調な経
済成長を遂げて世界の注目を浴びた。軍
政によって長い間、国際的な経済制裁を
受けてきた東隣のミャンマーさえも、民
主化路線に舵を取ったお陰で外資が流れ
込んでいる。昨年、私が訪れた首都ヤン
ゴンのホテルはビジネスマンであふれて
いたし、最近では日本企業の進出を報じる
記事がたびたび新聞紙面を飾る。

それに比べ、バングラデシュのことが
日本で話題になることは少ない。新聞紙
面やテレビのニュースでバングラデシュ
のことが報道されるときは、ろくでもな
いことがほとんどだ。

私がすぐに頭に思い浮かべるのはサイ
クロンによる洪水の惨状である。大小河
川の洪水や沿岸部の高潮で、二か月近く
国土の半分以上が水没してしまうという



のだから驚きを通り越して空いた口がふさがらない。ガンジス河、プラマプトラ川、メグナ河という世界有数の大河が作り出したデルタ地帯に位置しているからといって、あまりの体たらくではないか。

記録を調べてみると、一九七〇年には被災者五十万人、死者二十二万人、一九八八年には国土の85パーセントが冠水、

被災者四千五百万人、一九九一年には死者十四万人という記録的な被害が出ている。これは阪神淡路大震災の死者約六四〇〇人、東日本大震災の死者・行方不明者約一万八五〇〇人と比べてみてもいかに大きな数字か分かる。こんな状態では、国民は生き延びることに精いっぱい、貧困から抜け出すことに精力を費やすことなどとてもできないだろう。

洪水によってなにもかも失い、川岸で茫然と流れを見つめている人々の群れ、劣悪な衛生環境と飢餓の中でうつろな目をした子供たち、都市のスラムにうごめく失業者の群れ、そんなイメージがバン格拉デシュには色濃くついて回る。

しかしバン格拉デシュに対するわたしのそんなイメージに変化をもたらしたのは二〇一三年に起こったダッカの商業ビル・ラナプラザの崩壊という衝撃的な事件だった。地震でもなく爆弾テロでもなく、九階建てのビルが白昼、轟音とともに突如として崩壊したのだ。その瞬間の映像はテレビで繰り返し報道された。ビルの中には縫製工場で働く約四千人の女

性労働者がおり、その多くが瓦礫に押しつぶされて亡くなったり大怪我をしたりした。「ラナプラザの悲劇」は、世界のファッション業界の過酷な現状を世に知らしめた事件として知られる。

その時、わたしが報道によってまず知ったのは、劣悪な労働環境や横行する不法建築、一月たった一万円程度の低賃金で長時間労働を強いられる発展途上国の貧しさだった。しかし報道は、そのような負の実態とともに、目覚ましい経済成長によって貧困から抜け出そうともかく

ダッカ(バン格拉デシュ)	87 ドル
ハノイ(ベトナム)	156 ドル
マニラ(フィリピン)	273 ドル
上海(中国)	496 ドル
ソウル(韓国)	1,852 ドル
日本(東京)	2,524 ドル

ワーカーの月額賃金

(2016/ジェトロ海外調査部)



バン格拉デシユの姿をも伝えていた。

崩壊したビルの中の縫製工場は、ダッカに五千ともいわれる繊維工場の一つにすぎない。いまバン格拉デシユは、GAP(米国)、フォーエバー21(米国)、H&M(スウェーデン)、ZARA(スペイン)といった世界的な大手アパレルメーカーの「ファストファッション」の生産拠点になっているといっているのである。崩壊した工場に製品を発注していたのもイギリスの激安ブランド「プライマーク」だった。日本のユニク

ロも二〇一三年にはダッカでTシャツなどの生産を始めている。

バン格拉デシユの縫製産業は二八〇億ドル(2016)に上る同国最大の産業に成長した。中国の人件費上昇などを受けて生産拠点の分散を目指す「チャイナプラスワン」の波に乗り、衣料品輸出額では中国に次ぐ世界第二位に成長したのだ。

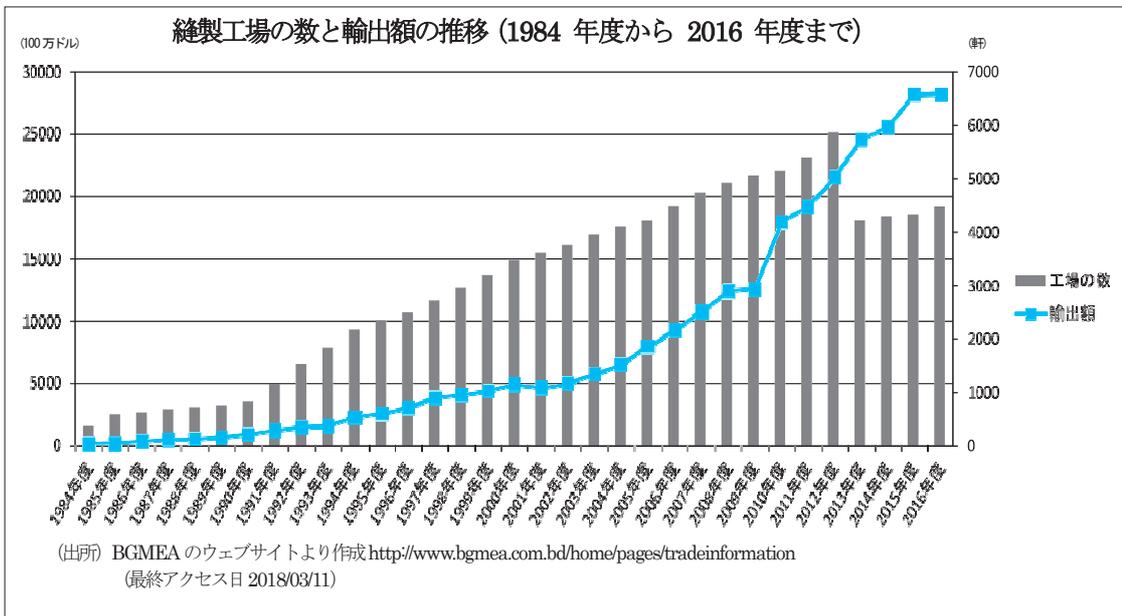
この結果、縫製産業はバン格拉デシユの輸出全体の80パーセントを占め、五〇〇万人の雇用を生み出しているといわれる。貧しいだけの国とわたくしが思っていたバン格拉デシユが、いまや経済成長の熱気に含まれているというのだ。

二〇〇五年にアメリカの大手投資銀行ゴールドマン・サックスが五〇年後の世界経済に非常に大きな影響をもたらす潜在能力を秘めた国々として十一か国を取り上げ、「ネクストイレブン」と名付けた。その十一か国の中にトルコ、韓国、メキシコやアセアン諸国のインドネシア、フィリピン、ベトナムなどと共にバン格拉デシユも含まれていることも知った。

また同行の予測による「二〇五〇年の

世界経済規模」では一位中国、二位アメリカ、八位日本などと並んでバン格拉デシユが堂々の二十二位にランクされているのである。その経済、産業の可能性、

縫製工場の数と輸出額の推移 (1984 年度から 2016 年度まで)



潜在成長力はすでに世界が認めているのだ。世界でも有数の貧しい国とされるバングラデシュが、未来に大きな可能性を秘めた国であることを知ったとき、私は無性にバングラデシュを訪問したくなった。

私が幼かった頃、日本も貧しかった。家にあった電気製品は裸電球と真空管ラジオだけだった。井戸水を釣る瓶でくみ上げ、山から拾って来た枯れ枝で湯を沸かした。小学六年生のときには、伊勢湾台風の影響で、ぶどう棚が押しつぶされ、桃の木が根こそぎ倒された。荒れ果てた畑を見つめ、茫然と立ちつくす父の背中が悲しかった。

その後、日本は急速に経済成長を遂げて、世界の先進国の仲間入りをしたが、私の胸の奥底には、貧しかった日々の記憶が身をひそめていて、時々顔を出す。貧しいけれど未来に希望があった幼い日にはもう帰れないけれど、バングラデシュに行けば、同じように貧しさから抜け出そうと目を輝かせる人々に会うことができるかもしれない。それは幼かった自

分自身に出会う旅でもある。

日本のような豊かな国に住んでいると、貧困の実態はなかなか見えてこない。国連や世界銀行やサミットで貧困を巡るグローバルな議論に参加している人の大半が、貧困線以下の生活をしている現場をまず知らない。貧困の実態が見えてこないことが、貧困がいつまでたっても解消しない理由の一つなのではないだろうか。世界でもっとも裕福な五十人の年間所得は、もっとも貧しい十億人の所得の合計に近い。

貧しさとはなんなのか。貧しい人たちというのはどこにいて、どのように生きていくのか。このようなことはマクロの貧困率という数字だけを見ていても分からない。貧しさの現場に足を運び、貧しい人たちの声を聞き、彼らがどのようにしてそこから抜け出そうとしているかを、この目で確かめねばならな



い。

そのためには臨機応変に旅をすることが出来る自由が必要である。私がアジアの国の中でまだ訪問したことのない国は、北朝鮮とブータン、それにバングラデシュである。前二国はとても自由に旅することができるとはいいがたい。

日本のパスポートには「北朝鮮を除く世界各国と地域で有効である」との記述がかつてあった。いまこの記述はなくな

ったが、独裁者が支配する北朝鮮では、わたしのように気ままな行動を旅行中にとると拉致・拘束されかねない。ブータンも自由に旅行できない国のひとつだ。一人で旅行する場合、最低でも一日二百九十ドルの公定費用の支払いを強制されるし、国営のガイドをつけずに自由に旅することはできない。

暴君独裁の北朝鮮と「幸せの国」ブータンを一緒にしては申し訳ないが、予定に縛られず気ままに旅したいわたしからすれば、どちらも旅をしにくい国なのである。私にとってバングラデシュは、アジアで唯一残された自由に旅することができる国なのだ。

わたしの旅には気ままに動ける自由とともに、通訳がどうしても必要である。美しい自然や歴史的な建造物などを見て回る旅ならば言葉は必要ないが、関心があるのはヒトである。生業は何か、どんな暮らしぶりなのか、何が楽しみなのか、そこに生き、働き、子供を育てている普通のヒトにまず話を聞いてみたい。

バングラデシュで話されているベンガ

ル語の通訳兼ガイドは出発前にインターネットを通じて手配した。「一番安い旅行代理店」というキャッチフレーズに魅かれて、契約したのは「バングラデシュ・トラベルホームズ」という会社である。とりあえず二週間程度の旅行期間を想定していることを確認し、細かいことはダッカのホテルで落ち合ってから詰めることにした。

バングラデシュには外国人が訪れるようなめばしい観光地は少ない。ユネスコの世界遺産はシュンドルボンのマンガローブ林、ハゲルハットのモスク都市、バハルプールの仏教寺院遺跡群の三つだけだ。気ままにといっても、なにか目標がないと、どこを旅してよいのか分からないので、とりあえずこの三か所を念頭にに入れて、訪問先を考えることにした。

心配になったのは酒である。旅の楽しみのひとつは、その土地、土地の酒を味わうことだが、バングラデシュはイスラムの国である。イランやサウジアラビアのように国内で製造、販売はおろか外国人が持ち込むのも禁止するという狂信的

なイスラム信仰国ではないから、まったく手に入らないということはないだろう。しかし商店街に酒屋が看板を出し、街角にビールの自動販売機がある国とは違う。酒の調達に難儀するだろうし、あったとしても高い税金がかかっているに違いない。輸入酒などはべらぼうな金額で売られていることが多い。二週間分の酒として、紙パックの日本酒二升、ウイスキー一本、缶ビールニダース箱一つをスーツケースに詰め込んだ。

食いものことはまったく心配しなかった。世界有数の米作国だから、大好きな米の飯にはことかかない。バングラデシュは「米と魚の国」なのだ。温かいご飯と汁っぽいカレーがあれば食うものに困ることはない。

エアラインは相次ぐ事故で評判が悪く、したがって航空運賃も安いマレーシア航空を利用した。酷寒の日本を飛び出し、クアラルンプールを経由し、生暖かい風が吹くダッカの暗い空港に降り立ったのは二月六日の夜である。

グラミン銀行とムハマド・ユヌス

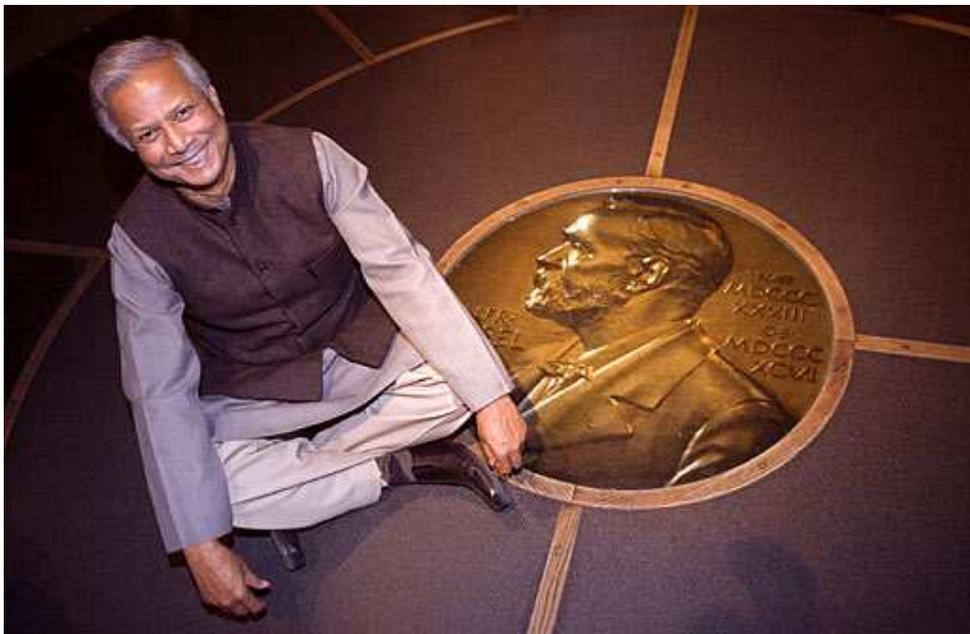
貧しきの実態を知りたいといっても、外国人が初対面のバングラデシュの人に向かって「あなたはビンボーですか」などと藪から棒に聞く訳にはいかない。無視されるか、罵られる程度で済めばいい方で、下手をすると胸倉を掴まれてパンチのひとつもらいそうさ。

そこで思いついたのが、ムハマド・ユヌス(一九四〇〜)が始めたグラミン銀行の活動である。彼はグラミン銀行を創設し、貧しい人たちへ無担保少額融資(マイクロファイナンス)を行い、貧困の削減に寄与したとして二〇〇六年にノーベル平和賞を授与されている。グラミン銀行の活動を追って行けば、バングラデシュの貧困の実態と、そこから抜け出そうとする人々に突き当ることができるのであるか、そう考えたのである。

バングラデシュ第二の都市チッタゴンで大学の経済学部長だったエリートのもムハマド・ユヌスを変えたのが、一九七四年にバングラデシュを襲った大洪水と飢饉

だった。大学の近くの村でも人々が飢えに苦しみ、次々と死んでゆく現実には、彼は経済学者として大きな無力感を味わったという。

貧しい人たちに何ができるか、大学近くのジュブラ村で住民の聞き取り調査を始めた彼は、三人の子供を持つソフィアという女性と出会う。ソフィアは高利貸しから



五タカの金を借りて竹の材料を買い、自宅の椅子を作っていた。竹の椅子は高利貸しが五タカ五十パイサで買い取る。高利貸しは高い利息とともに、借金を盾に製品を安く買ったたくのである。一日働いてソフィアの手元に残るのは五十パイサ(当時の円換算レートで約二円)だけだった。

ジュブラ村四十二世帯が高利貸しから借りていた金額は全部で四千円ほどにすぎない。彼は住民たちが必要としているのがわずかな金であること、そのわずかな金がないために貧困から抜け出せないことを知り愕然とする。

彼は返してもらおうことなどあてにせず、村の女性たちに自分の金を四千円貸し与えた。驚くことに金はすべて返済された

貧困のない世界を創る

ソーシャル・ビジネスと新しい資本主義

2006年度ノーベル平和賞受賞者、グラミン銀行創設者
ムハマド・ユヌス [著]
猪俣弘子 [訳]



のだ。そんな彼の経験が、弱者のための銀行・グラミン銀行の創設（一九八三年）につながる。

彼が編み出したのは、マイクロファイナンスと呼ばれる、貧しい人向けの無担保少額融資である。資産を持たず、したがって担保にするものもない貧しい人たちは、銀行などの金融機関から見放されている。貧しいものに金を貸すのは危険が大きいき、少額融資は手間がかかる割に利益が少なく非効率的である。

貧しいものが金を借りようとするれば、返済されない危険を見込んで高い利息を取る高利貸しを利用するしかない。高利貸しから借りるためには、市場金利の十倍にも当たる年率百パーセント〜二百パーセントの金利を支払わなければならない。

ユヌスは、まともな金融機関から見放され、相手にされない社会の最底辺の人たちに金を貸すビジネスを始めたのである。常識的に考えれば、借りっぱなしで返済しないものが続出し、ビジネスは行き詰まるだろう。



高利貸しは、その危険を見こして高い利息を取るのである。日本の場合でも、まともな金融機関にアクセスできなくなったものが数居をまたぐいわゆるヤミ金融は、高金利はもとより、いざとなるとバックについている怖いお兄さん方による脅迫の効果も計算に入れて金を貸すのだ。

ところが返済能力の乏しい社会の底辺の人たちに無担保で金を貸すグラミン銀行は98パーセントという驚異的な返済率を誇っているのである。なぜこんなことが可能なのか。日本では二十年ほど前のバブル崩壊時、大手の金融機関が相次いで破綻した。融資した巨額の金が返済してもらえず、不良債権化した果ての破綻だった。私の地元の信用組合などは、融資した金の四分の一が焦げついた。融資した金の何倍もの担保を抑えていたはずなのにである。

ノーベル賞をもらった直後に出版されたムハマド・ユヌスの著書の中で、彼は「村の人間関係や銀行の担当者との信頼関係を担保の代わりに、グラミン銀行は高い返済率を得ることに成功した」と述べている。

グラミン銀行の融資の対象は土地を持たず、まともな雇用の機会にも恵まれなない農村の貧しい女性である。融資を受けたいものはお互いをよく知る五人のグループを作らなければならない。まずそのうちの一人が融資を受けることができる

のだが、この五人が連帯して返済に責任を持つことが求められる。

グループは毎週一時間程度のミーティングを開く。金を借りたものもとより、まだ金を借りていないものも、このミーティングに参加しなければならない。グラミン銀行はたんに金を貸すだけでなく、担当者がそれぞれの村で開かれるこのミーティングに必ず参加し、融資した金を元手にして商売を始める方法などを指導するのだ。

しかし信頼関係だけで貸した金は本当に戻って来るのか、グループを作った五人が仲間割れすることはないのか、たくさんの人に小額の融資をするには手間がかかるが、その経費をねん出できるのか、などなど疑問は尽きない。

さらに、日本の銀行は豊かな個人の金融資産を預金という形で集め、それを融資の原資にしているのだが、グラミン銀行の原資はどこから出ているのか。かつての日本の金融機関のように、回収のめどがたたない貸付金を、回収可能としてごまかしているのではないのか、日本の

バブル崩壊を経験したものととしては素直に驚異的な返済率を信用できないのである。

せっかくバングラデシュに行くなら、グラミン銀行を訪れ、じかにそのへんのことを聞いてみたいと思うのは当然だ。良くいえばものおじしない、言い換えれば凶々しいのがわたしの生来の性格らしい。ダッカに着いて早々に、アポイントも取らずグラミン銀行本社に乗り込んだのだが、その話をする前に、混沌を詰め込んだ坩堝のような町ダッカの印象について少し触れておこう。

首都ダッカの光と影

ダッカの街角は縁日でごった返したように人であふれていた。人込みは嫌いな方ではないが、初めての町でいきなり大群衆に取り巻かれては、いささか落ち着かない気持ちになる。朝の九時を少し過ぎていたから、通勤時の混雑でもなからう。近くに市場があるということなので、買い物客が押し寄せたのだろうか。

バングラデシュはシンガポールやモナコなどの都市国家を除けば世界一、人口密度が高い国なのである。おおよそ日本の人口密度の三倍と考えればよい。日本の北海道と東北を合わせた面積ほどの国土に、約一億六千万人が住んでいるのである。国連では二〇三〇年にはバングラデシュの人口は二億人を超えると予測しているが、戸籍に登録されていない人も



勘定に入れると、現在でも二億人を超えているという説もある。

その首都ダッカも世界一の人口密度を誇る町である。農村では食えない貧しいものたちが、職を求めてダッカに流入しており、すさまじい勢いで人口が増加している。だから当然、住宅や道路といったインフラの整備や公共サービスも追いつかない。住宅の価格はうなぎ昇りというし、電力不足でひんぱんに停電する。

さらにひどいの慢性的な交通渋滞である。この日、私が泊まっていた街の中心部のホテルからハキロほど離れたブリゴング河の船着き場ショッドル・ガットまでタクシーで実に一時間もかかったのである。バングラデシュ国民に自家用車が普及するのはまだかなり先だろう。バイクさえまだ少ない。バイク普及以前にこの渋滞なのだから、先が思いやられる。

渋滞が激しくなるのは車の数に比べて道路が整備されていないからだ、スピードの異なる雑多な種類の車が道路にあふれることも原因のひとつだと思う。まづもっとものろいのがリキシャ。名前の



由来は日本の人力車といわれるが、客車を連結した自転車を人間が漕ぐのだから、当然のことながら一番遅い。ダッカ市内に四万台ぐらいは走っているといわれる。

次がオートリキシャ。リキシャの発展型で、かつて日本で走っていたオート三輪車のようなものだ。最近では、バング

ラデシュで生産される天然ガスを使っていることが多いので、地元の人はCNG (Compressed Natural Gas) と呼んでいる。大型のバスやトラックを除けば、車はほとんどが日本のトヨタの中古車である。

最近、法律が改正されて、生産されてから六年以上たっている中古車は輸入できないことになったから、比較的きれいな車が多い。このようにスピードが異なるリキシャ、CNG、自動車が混然一体となって道路を走るので、混乱は免れない。

イギリスの経済誌エコノミストが発表した「世界で最も住みやすい都市」のランキングでダッカは一四〇都市中の三九位。ビリから二番目だ (SOG)。医療、文化・環境、教育、インフラなど、いわゆるクオリティ・オブ・ライフを数値化して比較したものである。最下位は自爆テロや迫撃弾が炸裂する戦乱状態のシリアの首都ダマスカス。下から三番目は治安の悪さで夜の外出は命の保証がないというパプアニューギニアの首都ポートモレスビー。この二都市に挟まれたワースト二位であるから、ダッカがいかに住み

にくい町がよく分かる。

ホテルのロビーに現れたガイドは、彫りの深い端正な顔つきをした四十代の男性だった。渡された名刺を見ると、名前はアフマド・アブル・カラム・アザッドとアルファベットで表記されている。イスラム圏では自分の名前の後に父親の名前や先祖の名前を続ける。あまりに長い



のでどう呼んだらいいかと聞くと、幼いころからミランという通称で呼ばれているというから、そう呼ぶことにした。彼はわたしが契約した旅行会社の代表でもある。「社長さんご自身にガイドしていただけとは恐れ入ります」と言ったら、会社は電話番号の事務員が一人いるきりの個人経営だという。

わたしが関心を持っているのは、貧しい人たちへのNPOの援助の実態やグラミン銀行のソーシャル・ビジネスについてであることを告げると、国中どこでもそれらの活動に出会う機会はたくさんあるという。ダッカ大学の経営学部を卒業したというだけあって、経済のこともよく理解しているようだ。このミランという社長兼ガイドとは、地方への旅も含めて二週間付き合うことになる。

ミランの薦めで私が最初に向かったのは、イギリス植民地時代の古い建物がひしめき合う旧市街のオールドダッカ。ブリゴング河の河港を中心に発展した商業地区だ。人口密度の高いダッカの中でもひとときわ人が多い地域である。レーンと



呼ばれる細い路地が迷路のように広がり、河港に集散する人と物資が行き交う。

オールドダッカにあるシュッドル・ガット（ガットは船着き場）は、ダッカを代表する河港で、大きな客船や貨物船、漁船、対岸へ渡る住民を乗せた小舟などが行き交っている。この船着き場は地方とダッカを結ぶ連絡船が着く港であり、



ダッカの玄関口でもある。ダッカはベンガル湾からは二百キロ近くも遡ったところに位置するのだが、海を航海するような大型の船も遡ってくるのが可能なのだ。またバングラデシュ南部は、南北に走る大河やそれらを結ぶ水路が縦横に発達しており、ダッカと地方を結ぶ客船は安くて便利な庶民の足である。



船を降りた人たちがやってくる河沿いの道を、リキシヤと人波を避けながらぶらぶらと歩いてみた。道路脇の建物はいずれもかなり老朽化していて、ラナ・プラザビルの崩壊を思い出させる。一階はほとんどが商店だが、サリーや靴、日用雑貨、駄菓子といった庶民性の強い商品を商っている店が多い。

歩きだしてすぐに、土手の下のゴミ捨て場で、ゴミを漁っている子供たちを見つけた。日本でいえば、まだ中学生ぐらいだ。月曜日の午前中なので、普通の子供なら学校へ行っている時間だ。世界中どこへ行ってもゴミの山を漁るのは貧しいものたちと相場が決まっている。わたしがバングラデシュで出会った最初のビンボー人であることは間違いなさそうだ。早速、河原に降りて、彼らから話を聞いてみることにした。

ゴミは近くの家庭や商店から出た新聞紙や包装紙、ダンボール箱、ビニール袋などの「燃えるごみ」である。日本なら施設で焼却され、その灰が最終処分場に運ばれることになるが、バングラデシュでは自治体がゴミ焼却施設を運営する金がないのか、不法投棄されたゴミの山があちこちで目につく。

「こんにちは、ゴミを拾ってどうするの」近づきながら声をかけると、最初は警戒していた彼らも作業の手を休めて、見慣れぬ外国人を興味深そうに眺めている。足元を見ると三人ともはだだ。一番年



上らしい男の子がひもで縛った紙の束を指さして答えてくれた。

「紙を集めているんだ」

そういわれればあたりのゴミの量はだいぶ少なく、残っているのはビニール袋やプラスチックの破片などだ。

「集めた紙はどうするのか」

「船で買い集めに来る人がいるから、売るんだよ」

彼らの話によると、ゴミの山の中から紙類だけを分別して集めるのだという。集めた紙は、再生工場に持ち込まれるらしいが、子供たちと再生工場の間には仲買人がいるらしい。新聞紙や雑誌などの良質の紙で一キロ当たり五円程度だという。

国連の調査によれば、ダッカにはこの子供たちのようなワーキングチルドレンや路上で生活するストリートチルドレンなどの浮浪児が三十万人近くいるという。私もこの後、路上に寝ている子供たちの姿を何回か目にするようになる。

ガイドのミランの話によると、このような浮浪児たちは田舎の親元を離れて、ダッカに出て来た子供たちがほとんどだという。子供たちは、家庭の貧しさや親の離婚、虐待などで家を離れ、仕事が得やすいダッカに集まる。自然災害がこれをさらに助長する。子供たちに、どこに住んでいるのか聞いたのだが、なかの一人が河岸の建物を黙って指さしただけだった。

「君たちは学校へは行かないのか」
「学校はあまり好きじゃない」

バングラデシュの義務教育は六歳から始まる五年間の小学校だけ。中学まで義務教育化するという法律はあるらしいが、まだ実施には移されていない。したがって中学の就学率は半分程度だという。浮浪児たちは小学校さえまともに通えず、読み書きもできないものも多く、成長しても社会の底辺から抜け出すことは容易ではない。

ゆっくり話を聞きたかったのだが、あたりの異臭が耐えがたくなってきた。河に目をやると水は炭を溶かしたように黒い。土手から眺めていた時は、ひかりの反射のせいだろうと思っていたが、小舟が作り出す波紋の黒さと酢酸のような匂いから、これは染料の色ではないかと気づいた。

ダッカで繊維産業が急成長していることは前述したが、衣料品や皮革の製造過程では様々な染料や化学薬品が使われる。汚染された廃液が、十分な処理をされないうまま河に流れ込んでいるのだろう。

土手に上がろうとして一步踏み出した時、ぬかるみに足を取られ、片方の靴がずぼっと泥に埋まってしまった。散らばっているゴミに、ぬかるみが隠れていたのだ。しまったと思って足をすぐに引き抜いたのだが、靴は上面までべったりと真っ黒な泥がついてしまい、靴下にも黒い汁がしみ込んでいる。

このままでは気持が悪くて歩けない。靴と足を洗う場所がどこかにないか、周囲を見回していると、ひとりの子が自分について来いというように手招きした。異臭のする河の水ではとても靴や足を洗う気にはなれない。その子のあとをついてゆくと、土手脇の古いビルに案内された。二階に上ると私の足元を指さして、靴を脱げというそぶりをする。

靴は子供がきれいに洗ってくれた。さらに湿ったタオルで足もきれいに拭いてくれた。

思いがけずも浮浪児に親切にされ、どこか変な所に連れ込まれるのではないかと一瞬でも心配していた自分が情けなくなった。仲間の元へ戻ろうとする子を呼び



とめ、ベンガル語のありがとうを意味するドンノバートを繰り返しながら、その手に百タカ札を握らせた。

その時だった。私の声に気づいたのだろう、隣の部屋から同じぐらいの年恰好の子供たちが何人も出て来た。空き家になったビルの中にある浮浪児のたまり場に案内されたのかと思ったが、ミランが

子供たちから聞いたところ、ここはNPOが運営する浮浪児たちのシェルターだったのである。

ここシュッドル・ガット周辺は、南部から船で密航してきた子供がそのまま住みつき、周辺の商店の荷物運びや路上でのもの売り、もの乞い、ゴミ漁りなどをして暮らしているケースが多いという。

このNPOでは、浮浪児たちに安心して居られる場所を提供し、読み書きなどの基礎的な教育の機会も提供している。簡単な炊事のできる場所やトイレなどを備えており、私の靴は子供たちが利用するシャワー室で洗ってくれたことが分かった。

「ミラン、地方から上京してくる子供が多いというけれど、地方政府のガバナンスはどうなっているんだ。貧しい子供たちを援助するための教育や福祉プログラムはないのか。行方不明の子供たちはそのまま放置されているのか」

「地方政府にガバナンスなんてものはありませんよ。もっとも小さい行政区をユニオンといいます、村長と十人ぐらい

の議員がいるだけです。役所の職員は村長の秘書とガードマンがいるぐらいです。これではガバナンスなんてできる訳がありません」

「地方の税収はないのか。日本では土地や建物にかかる税金は地方が徴収し、地方が使っている」

「地方で税金を納めている人なんて、ほとんどいません。年収三十万タカ以下の人は所得税が無税ですが、それを上回る人なんていませんし、いたとしても税金なんか払いません」



「それじゃあ、地方の役人や議員はなにをやっているんだ」

「おもな仕事は汚職です。たまにもめごとの仲裁とか、配給の割り当てをします」

ミランは現在のバングラデシュの政治に対してかなり批判的なようだが、あながち誇張だとは言い切れない。発展途上国で政治家や役人の腐敗が、発展を送らせている例は枚挙にいとまがない。

バングラデシュ政府は初等教育の就学率を96パーセントと発表しているが、五年間きちんと学校へ通う子は半分にも満たないという。十五歳以上の識字率が七割に満たない現状を考えれば、初等教育がまだまだ不十分ということはすぐに理解できる。

何らかの理由で親と離れざるをえず、日々の生活の糧を自らの裁量で得てゆくほかはない子供たちの運命はあまりに過酷である。彼らは満足な教育も受けられず、それゆえ社会の最底辺から抜け出すチャンスもつかめない。

浮浪児たちの姿は、ダッカではけして珍しくない。むしろ当たり前のように見

慣れた光景だ。それゆえダッカ市民の多くにとって、問題意識は徐々に希薄化し、ついには関心を失って無視するようになる。

子供に未来がない国に明日はない。バングラデシュのような開発途上国にとってきわめて重要となるのが、未来の労働力を育成するために投資を行うことだ。にもかかわらず、バングラデシュの教育分野への公的支出は、対GDP比で3%未満に過ぎないという。二〇〇〇年九月、国連のミレニアムサミットで、極度の貧困と飢餓の撲滅など、二〇一五年までに達成すべき8つの目標が掲げられた。「普遍的な初等教育の達成」はその2番目の大きな目標だが達成は容易ではない。

子供たちに礼をいい、河沿いの道を再びぶらぶら歩いて行くと、金属をたたく大きな音が聞こえて来た。河岸には大きな船が何艘か引き上げられているが、音はその船の中から聞こえてくるようだ。

「ミラン、あの音はなんだろう」

「あそこは船の修理や解体をしている工場です。古くなったタンカーや貨物船が

世界中からここへ集まってきます」

「あんな大きな船を、どうやって陸に揚げたんだ」

「いまは乾季で水位が下がっていますが、水位が上がったときに、川岸にわざと座礁させるんです」

「荒っぽいやり方だな。首都のど真ん中で船の解体をやるというのも信じられん。



ちょっと工場の中を覗いてみよう」

近づいてみると、船は河岸に三艘、ドックの中に一艘ある。いずれも十階建てのビルぐらいの高さがある大きな船である。金属をたたく音はその中でも一番大きい船体から聞こえてくる。

「ミラン、音は船の中からいくつも聞こえてくるな。船体をハンマーでたたいているような音だ。こんな大きな船を解体するのに人海戦術とは恐れ入った」

「シップ・ブレイカーと呼ばれるいます。デンジャラス（危険）、ダーティ（きたない）、デイミーニング（品がない）の典型的な3D職場です。廃船には重油が残留していることが多いし、PCBや水銀・鉛・アスベストなど有害な化学物質が使用されています。作業員の健康被害が問題になっていますが、失業者がたくさんいますから補充にはこと欠きません」

船体からはぎ取った鉄板を、担いで運ぶ数人の作業員に出会ったが、全員が素手と素足で作業している。ヘルメットもかぶっていないし、足元はサンダルだ。「人海戦術はいたしかたないが、こんな

危険な作業をするのに、素足にサンダル履きの作業はひどいな」

「食うものがなくて死ぬより、働いて死んだ方がまし、と思っっているんですよ。この工場は、毎年数百人の負傷者とかかなりの死者を出していると噂されていますが、会社が本当のことをいわないから、



「実体は闇の中です」

廃船が来ると、まず備品や計器類などの使えそうなものが取り外される。船体はタガネを叩いて切れ目を入れ、少しずつ引き剥がす。十階建てのビルの上で、未熟練労働者がサンダル履きで作業しているのだから、転落の危険が常につきまとう。事故がいくらか起こっても、会社側



は金をかけて安全対策を施すことはない。バングラデシュで船舶の解体業が盛んなのには理由がある。バングラデシュには高炉を持った製鉄会社がないのだ。人口一億六千万人の国に製鉄業がないということは信じられない話だが、二〇一六年現在、事実である。ダッカはいま経済成長に伴って、ビル建設ラッシュであるが、鉄筋や鋼板などの建設用の鋼材の需要は高まるばかりである。

解体した船の部材は、バングラデシュにとっては貴重な資源で、鋼材供給の60パーセントが船舶の廃材によるものなのだ。解体業者にとっては船主から解体費用がもらえるだけでなく、無料の鉄板が高値で売れる訳だから笑いが止まらない。船一隻の解体で上がる利益は、百万ドルともいわれている。

ミランの話を知っていると、悪いのはバングラデシュばかりとはいえない。運ばれてくる船は日本を含む先進国のものだからだ。船主は解体に多額の費用をかけたくない。しかし、法的規制の厳しい先進国で、廃船にするには多額の費用



がかかる。船主は法律の目を逃れるために、複雑な船籍変更を繰り返して、元の所有者を追跡困難にする。そうした船が、環境基準が甘く、労賃が安いバングラデシュに運ばれてくる。

世界は複雑な回路でつながっている。バッテリーは資本が必要とする格差である。バングラデシュで作られた繊維製品

が先進国に売られて行き、先進国で老朽化した船舶が Bangladesh にやって来る。経済のグローバル化は格差なしには成り立たない。

Bangladesh はいま、その格差の最底辺にいて、先進国にキャッチアップしようと必死にもがいている。それはかつての中国でありタイでありベトナムである。ダッカの町を歩くと、発展途上の国の首都に見られる特有の既視感にとらえられるのである。

貧民窟(スラム)・テジガオ訪問

泊まっているホテルの部屋から、空を見上げれば建築中の高層ビルにクレーンが林立し、見下ろせば車やバイクが道路を埋めている。街を歩けば、建設予定地のトタン塀には高級マンションの完成予想図が掲げられ、垢ぬけたファッションを身にまとった女性が行きすぎる。

しかし、一步薄暗い路地裏に入ると、屋台を引いた駄菓子屋とすれ違い、ブランド物のコピー製品や盗品らしき骨董品



を商う怪しげな商店が並んでいる。犬がけだるそうに横たわり、残飯のすえた匂いが漂ってくる。グローバル化の光と影のパッチワークが、発展途上国の首都の特徴的な表情なのではないだろうか。

反射ガラスに青空と白い雲を映す高層ビルや華やかなショッピングセンターが

光りの部分だとすれば、影の部分の代表はスラム(ベンガル語ではボステイという)である。地方からこころならずもやって来る浮浪児たちに出会った話を書いたが、発展する経済に吸い寄せられるように、地方から多くの人がダッカにやって来る。

ダッカはいま世界一の人口急増都市なのだ。それでなくても人口密度の高いダッカで、地方から食い詰めてやってきた人たちが、住む場所を確保するのは容易ではない。家賃が高騰しているからだ。ミランはダッカ郊外にあるウットラという町で、二十五坪ほどのアパートに妻と娘と三人で住んでいるのだが、家賃は月に二万タカ(約二万七千円)。同じ広さのアパートをダッカ中心部で見つけるとなると五万タカは下らないという。

よんどころなく人々が集まるのはスラムである。いまダッカのスラム人口は約四百万人といわれ、市民の三分の一はスラムに住んでいる計算になる。このうち約百万人はスラムで生まれた子供だ。

わたしが足を踏み入れたのは、ダッカ

中央駅からひと駅離れたテジガオという駅の近くのスラムである。東京でいえば神田か新橋といったあたりで、けして町外れではない。近代的なビルも建ち並び、カウラン・バザールという大きな市場が隣接している。国会議事堂にも近い。スラムは線路脇に沿って、数百メートルも続いている。線路の両脇に建ち並ぶ



バラックは線路から一メートルほどしか離れていない。列車は警笛を鳴らしながらスラムに入って来るが、周囲の騒音にかき消されて気がつかない人も多い。しかも線路はスラムの手前で大きくカーブしているから、列車の姿はかなり近づかないと見えない。

だから列車がやって来る直前まで、人々は線路内で立ち話をしたり、荷物を運んだり、商売道具を広げたりしている。列車がやって来ても住人たちは間合いを十分承知しているので、列車が体をこするのではないかと思うような位置で、平然と立ち話をしている。そして列車が行きすぎてしまうと、何事もなかったかのように線路内は再びにぎわいを取り戻す。

列車は山手線ほどではないが、結構頻繁に通過する。私が滞在した一時間ほどの間に五本の列車が通過した。一度は上りの列車と下りの列車が同時にやって来た。最初の列車に遭遇した時に、わたしはもう少しで轢かれそうになった。できるだけ列車を引きつけて、写真に収めようとしていたのだが、立っている位置が



線路にほんの少し近すぎたのだ。近く居た女性が「馬鹿野郎、何やってんだい」とでもいいながら、わたしを後ろに引張ってくれなかったら、危ういところだった。

スラムの中は長屋形式になっている住居が多い。どこからか拾ってきたような

竹と棒切れで柱と梁を造り、トタンやビニールシートやぼろきれを巻きつけただけの建物だ。床は板の上に段ボールを敷いている。これでは雨露をしのぐのもむずかしいかもしれない。一軒の住居の広さは、三坪ほどの一間だけだ。ここに一家あるいは仲間同士で住む。多い場合は五〜六人が住んでいるという。

ミランはスラムは危険だから近づかない方が良いという。昼間から麻薬や銃の取引がおこなわれており、強盗やひったくりの被害も多発していると強調する。

街角に立っている警官に少しチップを渡して同道してもらうこともできるというが、いくらスラムといっても、麻薬の売人や強盗ばかりが集まっている訳でもあるまい。それに最底辺の民衆は警察権力に対して面従腹背の態度をとる場合が多く、時には敵視さえする。警官と一緒にいたのでは私がスラムの人たちと気軽に接することは難しい。

「ミラン、ポケットには盗られてもいいぐらいの金しか持ってきていない。いきなり命までは取られないだろう」



「ピストルで脅かされた人もいると聞いていますよ。仕方がない。同行しますけど、その高価なカメラはできるだけしまっておいてください」

スラムの入り口は踏切である。当然のことながら踏切は、一般の人や車も通過する。とりあえず踏切の近くで話を聞いてみることにする。スラムの住人などい

と、ほとんどの人がうつろな目をして、所在なげにしているのかと思いきや、みんな結構忙しそうに動き回っているではないか。七輪をうちわであおぎながら魚を焼く女、肩にプラスチック製品を乗せて売り歩く男、水を運ぶ子供、そして足早に歩く人の群れ。

座り込んで髪をとかしてもらっている女性なら、相手をしてもらえるだろうと見当をつけて、話しかけた。

「ちょっと話を聞かせてください。あなたはこのうしろの家に住んでいるんですか。自分で建てた家ですか」

「そうだよ。これが私の家さ。家は借りているんだ」

「家賃は月いくらですか」

「月に千タカ(約一三五〇円)だよ」

家賃を払っているということは、大家がいるということである。不法占拠した線路内の土地に建てたバラックにも所有者がいて、不動産として立派に取引が行われている。家賃が払えなければ、追い出され、公園や路上に寝泊まりすること



になる。

「水やトイレはどうしているんですか」

「飲み水は買うんだよ。トイレは市場に共同トイレが何か所かある」

「なにか仕事はなさっているんですか」

「わたしはなんにもしていない。旦那がリキシヤワラ(運転手)をしている」

スラムの中といっても、住居に変わりはない。多くの人はここから、仕事に出かけてゆくのである。女性は家政婦、男はリキシヤ運転手や露天商が多い。これらの職業で稼げるのは月に四千タカほど。月に千タカの家賃は中流階級が住むアパートの家賃と比べるとけして高くはないが、スラムの住人の収入から見ればかなりの負担だ。

繊維産業が発展し、多くの雇用を生み出していると前に書いたが、バングラデシュの工業化はまだまだ未成熟で、田舎から出て来た人の多くが職を得るほどの労働力需要はない。したがって多くの人が、インフォーマルで雑業的な仕事に職を求めざるを得ないし、低賃金に甘んじるほかない。

「ミラン、ダッカ市役所や政府は、公営住宅を建設して、スラムに住む人たちを収容しようとしたのか」

「もう十年以上も前から、外国の援助をもとにして公営住宅の建設は始めています。しかし問題があまりに大きすぎます。百万人単位の人の集合住宅を造るのは容

易ではありません。その上、スラムの住民もなかなか移転したがないんです」
「ほお、それはどうしてだね」
「まず、家賃です。国から補助金を出して建設したといっても、家賃がひと月千タカという訳にはいきません。家賃が払えず、またスラムに戻って来てしまう例



はたくさんあります。それにダッカの中心部は地価高騰で、住宅は郊外に建てなければなりません。そうなる仕事を探すのが大変です。リキシャ運転手にして

も家政婦にしても、消費者がすぐ近くにいるスラムだから可能なんです」

「住む所だけあっても仕事がないとだめなわけだ。そうはいつでも、こんなに危険で、衛生状況の悪いところでは、子供がかわいそうだ」

「スラムの中にもコミュニティがあるんです。同じ部落から出て来た人達とか、親戚どうしとかが、お互いに助け合って生活しているという面もあるんです。託児所のようなものがあるから女性も働きに出られる」

いくらスラムといっても、そこには個人財産としての家財や建物があり、現実の生活基盤になっている限り、簡単に強制撤去すればよいという問題でもないよ

うだ。現状を追認し、この場所で環境改善することもむずかしいだろう。わたしが話を聞いた何人かに「ここに住んでいて何がいま一番必要か」と聞いたところ、

上水道と答えた人が一番多かった。しかし、不法占拠している鉄道線内では、ダッカ市当局も上水道の整備を図ることはないだろう。

住居の問題はすぐには解決不能と認め

た上で、教育や保健衛生の面で援助に乗り出しているNPOもある。学校はどうなっているか聞いたところ、NPOが寺子屋方式で運営する小学校がスラムの中にあるということだった。清掃活動や医療提供をしているNPOもある。現状を追認したまま、工業化が多くの雇用を生み出し、スラムの住民がそこに吸収されるのを待つほかないのだろうか。

スラムの中は住居だけではない。商店や食堂などもある。線路上で野菜や果物を売っているし、日用雑貨の訪問販売もある。靴の修理をやっている少年を見つけたので、日本から履いて来た草履を修理してもらうことにした。天(足の裏を乗せる部分)がイグサ、鼻緒が布の草履で、足になじんでいる。長年にわたる乱暴な履き方で鼻緒が切れそうだったが、少年は手持ちの工具で手際よく修理をし



てくれた。

「いくらだ」と尋ねると、「いくらでもいい」というので百タカ出してやった。ミランは「大喜びしているはず」というが、日本で草履屋さんを持って行けば、修理代は千円を下らない。なにもせずに金を渡すのは抵抗があるが、仕事の対価と考



えれば、少し多めでも金を渡しやすい。スラムの中は当然のことながら愛想のいい連中ばかりとは限らない。写真を撮っているとき「わたしは限らない、見世物じゃないんだよ」と、ののしられることもあった。「子供たちに飴玉の一つも持ってきたらどうなのさ」と皮肉も言われた。決して興味本位だけでスラムに入り込んだ訳ではないが、彼らから見れば外国から

「高みの見物」に来た観光客にすぎないだろう。

わたしの泊まっているホテルは一泊百USドル（七千七百タカ）だ。バーで一杯飲んで、レストランで夕食をとれば五十USドルはする。

これだけでも彼らの一年分の家賃に等しい。それを考えると、うしろめたい。しかし彼らから目をそらすことはしたくない。彼らがこの地球上にいないかのごとくふるまいたくない。まず現状をこの目で見る。その上でわたしに何ができるか考える。そこから始めるしかない。

もちろん、ひとりの人間がどうにかできるものではない。バングラデシュはインドと並んでNPO大国といわれ、保健、教育、開発などの分野で活躍する団体は三万ともいわれる。先進国からの援助も多く、毎年四月にパリで開催される債権国会議で援助額が決まらないと国家予算が組めないほどだ。

国際社会の一層の援助が必要であることは間違いないが、他国からの援助に頼るだけではバングラデシュも情けない。

近年の経済成長の恩恵を受けて、富裕層や中間層も増えてきているのだから、バングラデシュの人たち自身が貧困と格差の問題に真剣に取り組むべきだろう。大きな貧富の差の解消も課題である。困ったものを助ける喜捨（ザガード）は、イスラム教徒にとって守るべき五つの重要な戒律のひとつでないか。



グラミン銀行本社訪問

グラミン銀行の本社はダッカの商業地区ミルプールにある。近くには植物園や動物園があり、喧騒渦巻くダッカの中では比較的落ち着いた雰囲気のところといえよう。

ガイドのミランは、古いモスクや有名な建築家の手による国会議事堂など外国人観光客に人気のある観光名所に案内しようとするが、「建築物にはあまり興味が湧かない」とこれをやんわり拒否して、グラミン銀行に連れていくよう頼んだ。

事前のアPOINTは取っていないが、受付で来訪目的を話した上で、暇そうな役員のひとりと一時間ほど話ができればいい。それがだめなら広報担当の部門ぐらいあるだろうから、その責任者に面会を申し込もう。そんな思惑に当惑顔のミランをせかし、職員の会社時間と同じくらい朝早くにグラミン銀行の門をくぐった。

グラミン銀行本社はダッカにはまだ珍しい二十一階建ての高層ビルである。「貧

者の銀行」にしては建物が立派すぎると思ったが、内装などは質素である。受付には、ひげの剃りあとが濃い、いかめしい顔つきの男が三人座っていた。日本の丸の内や霞が関なら、上品で高級感あふれる制服に身を包んだ美人のお嬢さんが、にこやかに出迎えてくれるところである。

イスラムの国では女性の社会進出の垣根が一般的に高いなかで、バングラデシ

ユデでは、縫製産業などの工員として女性の雇用が進んでいることは前述のとおりだ。しかし女性ご用達を掲げるグラミン銀行が、受付嬢としてさえ女性を雇用していないのであれば、バングラデシユの女性の社会進出はまだまだという印象をぬぐえない。

ノーベル賞の栄誉にも輝き、国際的に



も知名度のある銀行なので、受付では英語が通じると思ったが、返って来た挨拶はイスラム教徒専用のアッサラーム・アレイクム。アラブ風の私の服装がいけなかったのだろう。

訪問の目的と、わたしの質問に答えられる人に面会したいという用向きを、ガイドのミランに説明してもらったが、受付の男たちの態度は要領を得ない。責任ある立場の人間がまだ入社していないから、しばらく待ってくれということなので、受付の裏にあるノーベル平和賞の受賞記念展示室をしばらく覗いて時間をつぶすことにした。

展示室はムハマド・ユヌス博士がノーベル平和賞を授与された時の写真パネルがたくさん掲示されていた。ストックホルムの授与式の様子や彼の笑顔が大笑しになっている写真が多い。そんな写真パネルの中で私が注目したのは、ユヌス博士と並んでノーベル賞のメダルを手にして立っているひとりの女性だった。

写真の脇にあった解説を読むと、この女性はユヌス博士と共にグラミン銀行を

代表して受賞の榮譽を受けたモサマト・タスリマ・ベグムさんだ。彼女は一九九二年に一匹のヤギを飼うためグラミン銀行からおよそ三千円を借り、それを元手にビジネスを成功させた。借り手代表のひとりとして、グラミン銀行の経営を担う理事会メンバーだとも書いてある。

日本の企業でも社外取締役を置くことや女性を幹部に登用することを求める動きが広がっているが、ユーザーを役員に登用するような例は聞いたことがない。

しかも彼女のような借り手代表の女性がグラミン銀行の経営方針を決める理事会の四分の三を占めているという。

展示室を十分ほどかけて一回りし、受付に戻ると、あなたとお会いできるも



のが待っていると告げられた。ミランは、ミスター・カワサキはグラミン銀行を訪れるために、日本からはるばるやって来たのだから、誰かに会わせてくれないと私が困ったことになる、だいぶ強硬に申し入れたらしい。

エレベーターを八階で降りると、若い男性スタッフが待っていて、オフィスの一角にある大きな会議用のテーブルに案内してくれた。室内は蛍光灯がまばらなせいか、薄暗い。外からの採光がある窓際はいいが、窓から離れた奥の方では書類を読むのにも苦勞しそうだ。机と椅子がすべて木製なのも珍しい。机の上に乗っているパソコンは、最近の日本ではほとんど見かけなくなったブラウン管方式のCRTモニターである。

ほどなくして現れたのは、眼鏡をかけた白いワイシャツにダークスーツという、いかにもビジネスマンらしい男だった。国際プログラム部の部長という肩書だけあって流暢な英語をしゃべる。握手を離れた手で私に椅子をすすめると、自らも私と直角になる位置の椅子を引いて座

った。

「私はモルシエットといいます。日本からようこそおいでくださいました。グラミン銀行に関心をお持ちでのようですが、創設者のユヌス博士の著書や銀行のホームページには目を通されましたか」

「日本から来たカワサキです。突然のインタビューを受けていただいてありがとうございます。ユヌス博士の著書は日本語に訳されて出版されていますし、貴社のホームページはインターネットを通じて拝見しました。まず銀行の掲げた崇高な理念と実践に敬意を表します」

「ユヌス博士の始めたマイクロファイナンスの手法は世界中に広がり、いまや九十以上の組織が活動しています。お互いの交流も活発で、外国の組織から視察団もやってきますが、わたしがいつもお相手をしています。今日は何なりとご質問ください」

モルシエット部長は頬に笑みを浮かべながら、いくつかの資料をテーブルの上に広げた。私もノートを開き、メモを取る準備をする。



「まず初めに、ロビーにあるノーベル賞受賞の記念展示室で見たモサマトさんという女性の写真についてです。理事のひとり銀行を代表して授賞式に臨んだということですが、当銀行の役員構成、また株主構成はどうなっていますか」

「理事会 (Board) は経営方針を決める最高意思決定機関で、十二人で構成されて

います。そのうち九名が借り手女性の代表、三名が政府代表で構成されていますが、これは政府出資の25パーセントを反映しています。モサマトさんは当行とムハマド・ユヌス博士がノーベル賞を受賞した二〇〇六年当時の借り手女性代表です」

「ユーザーの意見を経営方針に反映させる仕組みは素晴らしいですね。ところで政府出資以外の75パーセントはどこからきていますか」

「残りはすべて借り手からの出資です。設立当時は外国のファンドからの出資もありましたが、いまはすべてわが国の貧しい人たちの預金です」

「配当金は払っていますか」

「8パーセントから12パーセントです。わが国の10パーセント近いインフレ率を考えれば、適当な数字でしょう」

モルシエット部長は手元の資料を見ることもなく、よどみなくわたしの質問に答えてくれる。お茶を勧められたので、ありがたくいただくと思えば、あわてて砂糖抜きと告げた。この国のお茶は湯

の量の半分ほど砂糖を入れるので、甘いのが苦手なのたしにはとても飲めない。「活動の規模についてお聞きします。現在の融資残高と利息、それに何人ぐらいの人に貸し出しているかです」

「融資残高は前月末(2016)で十一億三千万ドル、八百六十四万人に貸し出しています。そのうち女性が96パーセントです。利息はローンの種類によって違いますが、10パーセント前後です。支店の数は二五六八支店で、ほぼ全土をカバーしています」

私はノートに数字を書く、素早く割り算をした。一人当たりの貸出額は日本円にして一万五千円程度にすぎない。公務員の月給が一万円ほどのこの国では、そこそこの大金かもしれないが、いかにも少額である。

大手の商業銀行は手間がかかる割には手数料収入が少ない小口融資は、採算があわないから敬遠する。無担保だと貸し倒れのリスクも計算しなければならぬ。日本のアコムやプロミスなどのいわゆるサラ金は無担保をうたっているが、源泉

徴収票や給与明細などで収入をチェックし、回収可能な額を見定めて金を貸す。それでも金利は18パーセントもする。質屋営業法による上限金利は109・5パーセントだ。

ユヌス博士が編み出した貧しい人への無担保少額融資は、お互いをよく知る村の女性五人をひとつのグループとして、



その中の一人に融資し、連帯責任を持たせることで、驚異的な返済率を実現した。

「98パーセントという返済率は信じられません。日本の金融機関は回収不能な債権を回収可能な債券と偽り、バランスシートを悪化させ、それが明るみになると、資金繰りに行き詰って破綻する金融機関が続出しました。当行では、たとえば一年以上返済が滞っている債券の額を把握して、正確に帳簿に載せていますか」

モルシェット部長はわたしのぶしつけな質問にも動揺する様子もない。

「それを説明する前に、私たちの返済の方法を理解してください。返済は基本的に一年以内です。借りた翌週から返済は始まります。さらに返済時にいくらかの金を預金することをお願いしています。返済ができない時、この預金を返済に充当することも可能です。このようなやり方で、一年以内に返済が完了しない人の率が1・85パーセントということです」

「病気をしたとか、災害に巻き込まれたとか、離婚をしたとかで、支払いに行き詰まった人はどうするんですか」

「三か月連続して支払いが滞った人に対しては、スタッフが介入します。返済額を減らしたり、猶予期間をとったりします。そういった人を含めて、一年以内に返済が完了しない人の率が1・85パーセントということですよ」

にわかに信じられないぐらいの高い返済率だが、モルシェット部長の丁寧な説明で、その理由が私にも少しは見えて来た。それはユヌス博士が著書の中で使う「信頼関係」という言葉が具体的にはどんな形を取っているのかということを理解して、初めて見えてきたのである。

「村の女性が銀行に足を運んで融資を申し込むのは敷居が高いでしょう。わたしたちはスタッフが村に出向きます。そして村単位のグループの全員と話をし、メンバーの納得と推薦を経て融資する人を決めるのです」

つまりグループの女性は、集団合議制によって借り手を選び、残りのメンバーはその返済に責任を持つのである。といっても日本の連帯保証人のように、法的な返済義務を負う訳ではない。ただし借



りた女性が返済を済まさないと同じグループの他のメンバーは融資を受けられない。借り手にとっては、メンバーの存在自体が返済をきちんとしなければいけません。プレッシャーになるのだろうか。

バングラデシユの農村部ではまだ強固な地域コミュニティが残っている。相互信頼といえれば聞こえが良いが、悪くいえ

ば相互監視ともとれる仲間うちの視線を圧力に、高い返済率が可能なのである。

しかしわたしがもっとも感心したのは、このような人的担保ではなく、借り手に対する啓蒙教育や経営指導を担当のスタッフがおこなっていることである。融資を受ける五人のグループは、事前に金の使い方などに関する研修を受講することが義務付けられている。また担当者が週一回、村を回って返済金を受け取る機会にも必ず話し合いを持って、融資した金の使い道や経営状況について一時間程度の話し合いをするのである。

こうして担当者は村の女性たちと日常的な交流を通じて彼女らの生活実態を把握し、相互信頼の絆を作り上げることによって返済を確実にしてゆくのである。

日本の金融機関の職員が、額に汗して融資先の現場を見て回るだろうか。どうしたら返済が可能なのか、一緒に悩んでくれるだろうか。空調の利いたオフィスで、機械的な書類審査をし、あり余る担保を抑えて融資するだけの金融機関が顧客の信頼を得ることができないの



はあたり前だ。

江戸時代後期の実践的農民思想家・二宮尊徳翁の「すべて商売は、売って喜び、買って喜ぶようにすべし。貸借の道もまた同じなり」という崇高な理念は、いまでもけて古くはない。

「ユヌス博士は、施しでは本当に人を救えないといっています。施しを受けた人は卑屈になり、負い目を感じ、自立する勇気を失ってしまうからです。金を借り、金を儲け、金を返す行為は、これとまったく逆です。生まれるのは誇りと自立への意欲です。そして私たちのビジネスも

持続可能になります。いまグラミン銀行には二万五千の職員が働いていますが、きちんと給料を支払えるだけの利益をあげています」

モルシェット部長は時間を気にすることもなく、突然訪問した私のために一時間以上の時間を割いて熱弁をふるってくれた。別れ際に彼はいくつかの資料を私にくれたが、そのなかの「十六の決意」という文書がいま私の手元にある。

子供に教育を受けさせること、清潔な生活をする事、一年を通じて野菜を栽培すること、お互いに助け合うこと、衛生的な水を飲むことなどといったことが書かれている。

グループのメンバーは、毎週のミーティング時に、かならずこの「一六の決意」を復唱し、守ることを誓うのだという。この決意を採用するようになって、ほとんどのメンバーは子供を学校に通わせるようになったという。このようにグラミン銀行は、たんに金を貸すだけでなく、農村の経済や社会の変化を促し、貧しい女性たちが自立して行くことを手助けし

ているのである。

本社を訪問し、銀行の理念や包括的な数字は分かったが、実体はどうだろう。ユヌス博士の理念やモルシェット部長が語ったシステムは、末端の融資の現場で実際に生きているのだろうか。

借り手の女性たちはどのような目的で金を借り、どのような使い方をしているのだろうか。女性の地位が低いこの国では夫が金を使い込んでしまわないのだろうか、このようなことは融資の現場に行かなければ分からない。そのためには全国で二千五百あまりあるという支店を訪ね、できれば金を借りた女性のもとにも出向かなければならない。

モルシェット部長に適当な支店のいくつかを紹介してもらおうかとも思ったが、今日依頼して今日中という訳にはいかないだろう。全国に二千五百も支店があるというのだから、小さな町でもひとつぐらいは支店があるはずだ。とりあえず、ダッカ近郊の支店をぶらりと訪ねてみることにした。

シヨナルガオの女性起業家

シヨナルガオは、ヒンドゥー語で「黄金の都」を意味する古い町である。ダッカの東南約二十五キロにあり、気軽に日帰りできる憩いの場所としてダッカ市民に人気がある。

この町はメグナ河の水運に恵まれて、

ベンガル地方をデーヴァ朝が統治していた十三世紀から、ムガル帝国下で首都がダッカに変遷されるまでの間、ベンガルの首都として繁栄を続けた。いまではその地位をダッカに奪われてしまったが、かつての栄華をしのぶ建造物や博物館があるという。

グラミン銀行本社を後にして、さてど



この支店を訪ねようとガイドのミランと相談した時に、彼が真っ先に薦めた町だ。ガイドとしてみれば、約束も取り付けずに支店を訪問し、空振りに終わったら申し訳ない、その時は博物館にでも案内すれば役目が果たせると考えたのだ。

チャーターした車で、渋滞が激しいダッカの市街を抜け、シヨナルガオに着いたのは午後一時ごろ。グラミン銀行シヨナルガオ支店は、小さな市場の一角に建つ、古い三階建の雑居ビルの二階にあった。一帯は商業地区で、たくさんの商店や露店が軒を連ねている。

さっそく、所長に面会を申し込んだが、午後の仕事が始まったばかりで、支店の中は融資を受ける人や、返済に来た人でごったがえしている。本社のモルシェット部長の名刺を見せて、いかにも紹介を受けてきたかのようにふるまう。ジャヒッドさんと名乗る所長の机の前に腰をおろして、話を聞こうとしたが、次々と面会を求める人がやって来て落ち着かない。

この支店には所長以下、十人のスタッフがおり、約八千人の人に融資をしてい



ることなど、いくつかの質問に答えてはくれたが、貸しだす札を数えたり、帳簿を付けたりととても忙しそうだ。融資を受けにきた人たちも、順番がなかなか回ってこないの、イライラしている様子が見受けられる。ジャヒッド所長も、十分ほど相手をしてくれたが、ついに愛想が悪くなり、後にしてくれと横を向いてしまった。

いかに図々しいわたしでも、仕事の邪魔になるのは気が引ける。仕方ないので、金を借りに来た人から話を聞くことにした。最初に声をかけたのは、融資の順番を待っているらしい真っ黒いヒジャブをまとった女性。歳は四十ぐらいだろうか、わたし好みの知的な顔をした美人である。「こんにちは。日本からグラミン銀行のことを勉強してきたものですが、お話を聞かせてください。今日はお金を借りに来たのですか」

「いいえ、返済に来ました」
「お金を借りたのは、何のためですか」
「わたしは薬剤師です。ここの市場の中で薬局を開くためにお金を借りました」

パルピンさんというこの女性は、八年前にグラミン銀行の教育ローンを利用して薬剤師養成の専門学校で一年間学び、薬剤師の免許を取得した。薬剤師の資格を得るのに一年は短いと思ったが、どうやら市販の薬を販売するのに必要な資格らしい。バングラデシュでは、いたる所で「FARMACY」の看板を目にするが、庶民は具合が悪くなった時に金がか

かる病院ではなく、まず薬局に飛び込むのだという。

薬局には資格を持った販売員を最低一名は置かなければならないと法律で決まっているが、無資格のものが営業しているケースも多い。彼女はこの資格をとれば女性でも働き口があるだろうと考えて勉強を始めたという。

パルピンさんは資格取得後、他人の経営する薬局に勤めていたが、三年前に独立して薬局を始めた。その時、薬の仕入れのために、八万タカ借りたのが最初であった。経営は軌道に乗り、最初の融資は順調に全額返済し、いまは二回目の融



資六万タカの返済中だという。

「一般の商業銀行からではなく、なぜグラミン銀行からお金を借りたんですか」

「わたしのような女性には一般の銀行はお金を貸してくれません。わたしの友達がグラミン銀行からお金を借りたことがあって、わたしを紹介してくれました」

「担保や保証人は必要ですか」

「担保は必要ありません。保証人は夫と紹介してくれた人です」

「五人でグループを作って、そのうちの一人が順番に借りるという仕組みを本社で聞きましたが、あなたへの融資はそれと違うようですね」

「あなたがいうローンはベーシック・ローンというものです。わたしは八年前に教育ローンを利用しました。教育ローンは、在学中は利息がかかりません。卒業すると利息は5パーセントです。これは勤めをしながら全額返済しました。いま借りているのはマイクロ・エンタープライズ・ローンというものです。このローンはベーシック・ローンが一万〜二万タカなのに対し、十万タカ程度の借り入れ



が可能です。このローンはグラミン銀行のメンバーになって二年以上たたないと受けられません」

パルビンさんは、たとえ小規模とはいえ薬局という事業を展開する事業家である。結婚すれば、できるだけ家庭内にとどまり、夫や子供以外には顔を見せないのがイスラムの風習だが、彼女は果敢に

ビジネスの世界に乗り出した訳だ。

グラミン銀行創設者のユヌス博士が最近力を入れているのは、ソーシャル・ビジネス・エンタープレナー（社会ビジネス起業家）の育成である。商工業が発展途上にあるバングラデシュでは、まだまだ雇用の機会が少ない。彼は「仕事を探すのではなく、みずから起業家になって、雇用を生み出す」ことを推奨してきた。パルビンさんのグラミン銀行からの融資は、まさにこれを地で行くものと思える。

話がだいぶ盛り上がり、通訳するミランの声も次第に大きくなってきたからだろう、またもやジャヒッド支店長から支店内でのインタビューはご遠慮願いたいと忠告されてしまった。

さすがにミランも気が引けるらしく、また違う支店を紹介するから、今日は帰りましょうと、わたしの袖を引っ張る。支店の一番忙しい時間帯に訪問したのがいけなかったとあきらめて、雑居ビルの階段を下り始めたとき、子供を抱いた女性が階段を上がって来るのに出くわした。グラミン銀行に用事があったってやってきた



のに違くない。支店の外であれば文句を
いわれる筋合いはない。さっそく話を聞
くことにした。

「こんにちは。グラミン銀行からお金を
借りにきたんですか」

「わたしじゃないよ。娘がいま支店の中
にいて、金を借りるのを待っているけど、
孫が泣くから、わたしがお守をしている

のさ」

「なるほど。娘さんは何のために金を借
りに来たんですか」

「系の仕事をしている」

「お住まいはこの近くですか。できれば
その系の仕事を見せてもらいたいんです
が」

「ドンドマ村からだよ。村ではうちの娘
だけでなく、何人もが系の仕事をしてい
るから、どこでも見られるよ」

ドンドマ村への行き方をミランがこの
女性に訪ねているが、小さな村らしく、
口頭で説明するのは難しいようだ。娘が
融資を受けて戻ってくるまで待っていて、
案内してもらおうと考えていたとき、通
りがかった男性が声をかけて来た。

ラフマンさんというこの男性は、雑居
ビルの二階で診療所を開いている医師だ
という。昼食をとるための休憩時間で、
外に出てきたところを、わたしたちと出
くわしたのだ。孫を抱いている女性は、
ラフマン先生の患者でもあるという。ノ
ートを広げてこの女性と立ち話をしてい
た理由を告げると、その村なら往診に行

ったこともあるし、わたしがドンドマ村
まで案内しましょうと申し出てくれた。
外国人がグラミン銀行の実態を知るため
に、田舎の村を訪れることに興味を持っ
たらしい。

ドンドマ村は幹線道路からだいぶ逸れ
て、車一台がやっと通れるような細い未
舗装道路を二十分ほど進んだところにあ
った。先ほど訪ねた市場の周辺と違って、
田んぼや畑の中にトタン屋根の平屋が点
在する、のどかな農村風景が広がる。

ラフマンさんが行き交う人に、「系の仕
事」をしているレイハナさんの家はどこ
か聞いてくれた。レイハナさんの家は、
広い中庭をはさんで、長屋風の住居がコ
の字型に並ぶ一角だった。

中庭では数人の女性が「系の仕事」を
している最中だったが、顔見知りのラフ
マン先生と一緒にやって来たため、全員
が仕事の手を休めて笑顔で出迎えてくれ
た。

「みなさん、ここでなにを造っているん
ですか」

「ロープだよ。この辺じゃ、昔からロー

「ブ造りが盛んなのさ」

二人で大きな蚊帳のような布を広げていた年配の女性が大きな声で答えてくれた。ミランが「糸の仕事」というから、手織り機を使った織物の仕事だろうと想像していたが、糸をより合わせてロープを造る仕事だと分かった。

「その糸は何ですか」

「これはナイロン。昔はジュートを使



っ

たものだけど、いまじゃみんなナイロンかポリエステルになっちゃった」

そばで聞いていたラフマン先生が解説を加えてくれた。この地方はジュート（黄麻）の栽培が盛んで、そのジュートを使った麻袋やロープを造る家庭内手工業が昔から発達していた。特にこのドンドマ村は農業の副業としてほとんどの農家が麻のロープ造りに従事していた。しかし化学繊維が普及し始めると、チッタゴンなどの中小企業による機械を使った生産が盛んになり、この地方一帯のロープ生産は下火になってしまった。

「ナイロンのロープを造り始めたきっかけは何ですか」

「装置があったからさ。ジュートだってナイロンだって、ロープを造るやり方は一緒だよ」

「何人かで共同でやっているんですか」

「ここに住んでいるものはみんな親戚だから仲良くやっているよ。ロープを造るにはいろんな仕事があるからね」

バングラデシュでは十人以上の兄弟姉妹がいる家庭が珍しくない。そのうち複



数の兄弟が結婚しても生家にとどまり、同じ敷地内に家を建てて暮らすような場合、大家族になりやすい。ロープ造りにはいくつかの工程があり、それを親戚間で分業しているということと理解した。

「またもやラフマン先生の解説によると、ロープ造りの工程は、まず原料となるのが繊維系のヤーンを数本から数十本より合わせ、ストランドという糸の束を造る。

このストランドを三本より合わせたものがロープとなる。庭の隅の方で大きな糸車を操っている若い女性が扱っている細い糸がヤーンで、これからストランドを造るところだという。

庭先でにぎやかに話に花を咲かせてい

ると、雑居ビルの階段で会った女性が、娘と孫と一緒に帰って来た。さっそく、娘さんにグラミン銀行の融資の話聞かせてもらうことにした。

「こんにちは。グラミン銀行のことを調べています。お金はうまく借りられましたか」

「いままで何回も借りていきますから、問題ありません」

「今回はいくら借りたんですか」

「二万タカです」

「そのお金は何のために借りたんですか」

「糸を買います」

レイハナさんは二十二歳でここに嫁いできて、三人の子供を持つ母親である。

五年前に彼女が中心となって、さびれていたロープ加工の仕事を復活させたのだという。きっかけはグラミン銀行のメンバーになり、週一回開かれるミーティングに参加したことだった。

この村を担当するグラミン銀行の担当者、「お金を消費に使うのではなく、ビジネスに使う」ことを熱心に説いた。レ

イ



ハナさんは、子供を学校へ通わせるためには、女性も自分の仕事を持ち、母親が家計を支えることが大切だということをミーティングの中で知った。

自分に何ができるか、レイハナさんは義母や夫の兄弟の妻たちと話し合い、かつてこの地で盛んだったロープ加工の仕事に行き着いた。ロープ加工のための工

具や送致がまだ十分使える状態で残っていたのだ。

「返済は滞りなくできましたか。ビジネスはうまくいきましたか」

「いままで返済が遅れたことはありません。今回も毎週五百タカずつ返済し、十四回で返します。利息は十パーセント



です」

「このロープ加工の仕事は、一週間でどのくらいの収入がありますか」

「千五百タカぐらいあります。いまは返済だけでなく、毎週百タカずつ預金しています」

「旦那さんは何をしていますか」

「リキシヤの仕事をしています」

レイハナさんは、三人の子供の世話をしながら自宅でできるこの仕事がとても気に入っていると話してくれた。旦那も自分のリキシヤを持ち、まじめに働いていて、毎日六百タカの稼ぎがある。「グラミン銀行がお金を貸してくれてハッピーです」と話すレイハナさんの笑顔が素敵だった。

レイハナさんと話し込んでいるうちに、近所の人たちが何事かと徐々に集まり始め、わたしたちの周りを取り囲んだ。なかにはレイハナさんとの話に、大きな声で口を挟むおばさんも出てきた。すると、そのおばさんに反論するように、身振り手振りを交えて、また大声をだすおばさんがいる。わたしのノートを勝手にひ

っ



たくって、ページをめくる子供もいる。小さな子供が歓声を上げながら、庭を走り回る。

わたしがロープ加工の話やグラミン銀行の話の聞きかたがっていることを知ると、「わたしの話も聞きなさいよ。この娘よ

り精しいんだから」とばかり、通訳のミランの腕を引っ張るものもでてきて、ミランも辟易している。

あちらこちらから勝手に言葉が飛ぶものだから、ミランも通訳しかねている。こうなるとレイハナさんのインタビュも打ち切らざるを得なくなった。ラフマン先生もこの様子に苦笑している。最後にレイハナさんの写真を一枚残しておこうとカメラを構えると、彼女の周りにたちまち人垣ができた。

「おまえが真ん中にいなければだめだ」とおばさん連中に促されたので、ミランにカメラを渡し、わたしも皆と一緒に写真に加わることにした。